

# ニューカマーの中学生・高校生の基礎的学習能力養成のための日本語教材の開発と試行

神奈川大学 外国語学部 准教授 富谷 玲子

## 1. 研究の背景

2012年現在、日本に在留する外国人は約200万人を超え、人口の約1.6%を占める。中国帰国者およびその家族（日本国籍を持つが中国語を母語とする人たち）や、日本に帰化した外国出身者などを含めると、日本語を母語としない住民の数は大きくこれを上回るものと考えられている。日本語を母語としない住民のための日本語教育や生活情報を提供するための制度ならびにそれを根拠づける法律は現在のところ存在していない。

日本国内の共通語は言うまでもなく「日本語」であり、社会の様々な制度や習慣は、日本語識字能力（読み書き能力）を前提として構築されている。200万人を超える在住外国人の多くに日本語を学ぶ場が公的でないという事実は、在住外国人の人権という点でも早急に解決すべき重大な問題である。実際には、1980年代、在住外国人と直接接点をもった市民や基礎自治体の職員らの問題意識がきっかけとなり、市民活動、あるいは公民館活動などとして市民による「日本語教室」が開催されるようになり、在住外国人の急増に伴って、その活動は全国的に広まっていった。1980年代後半から日本人男性と外国人女性（主にアジア出身者）の国際結婚家庭が徐々に増加したが、ほぼ例外なく家庭内言語は日本語であるため、日本で生活するためには外国人女性が日本語を習得せざるをえない状況にあった。その学習を支えてきたのも日本語教室である。

2000年代になると、子どもの日本語教育が注目されるようになった。親や親族に伴って来日した子どもは、日本の小中学校に受け入れられたが、そこでの日本語教育が新たな課題となったのである。これに関しては、文部科学省の取り組みもあり、子ども（小中学生）のための日本語教育に関する様々な調査研究が実施され、さらに教材類も整備されてきた。最近では、学校教育の中に「日本語」という科目を設置することに関する議論も活発化している。

日本人と結婚した外国人女性の中には再婚者も多い。日本での結婚生活が安定するにつれ、来日以前の結婚によって生まれた子どもを日本に呼び寄せるケースが全国的に数多く見られている。義務教育学齢期（小中学校の年齢に該当する子ども）の場合は、居住地の公立学校が受け入れているが、小中学校内における日本語教育の実施は地域によってさまざまである。一方、義務教育学齢期を超えた子どもあるいは青少年の場合には、日本の学校に編入することができない。日本では高等学校が義務教育ではなく、入学には一定レベルの学力を有することを判断するための高校入試が「日本語」だけで行われている。日本の高校に義務教育学齢期を超えた子どもが入学することはほぼ不可能である。

また、各地の日本語教室は成人の在住外国人を対象として設置されてきたため、既に一般的な生活スキルや移動スキル、社会情報、規範に関する判断能力などの認知能力が完成していることを前提に日本語を教えている。10代後半の子どもは、上記のスキルや情報を習得する途上にあるため、成人を対象とした日本語教育の内容では十分な成果が得られない。高校生は日本での生活を支える「生活言語としての日本語」を習得するとともに、学校での勉強や思考を

支えるための「学習言語としての日本語」の習得も必要なのである。

10代後半の子どもの多くは、家族が日本にいるため、将来長期にわたり日本に在住する、あるいは永住する可能性が高い。日本で成人を迎え生活するにあたって、就職し日本社会の一員として生活するには、それを支えるための読み書き能力が必要不可欠である。

## 2. 目的

上記に記したような状況を鑑み、報告者らは市民活動や大学生ボランティアと連携しつつ、2011年4月から、神奈川県内で、ニューカマーの高校生を対象として、日本語による学習言語養成を目的とした教室を週1回、開催した。対象者は、初期日本語教育を終え、高校入試に合格して高校での勉強を開始したものの、高校での学習に必要な日本語能力がまだ獲得されていない来日2年未満の高校生である。日常会話と中学や高校での学習に必要な日本語の能力（学習能力）が異なることは広く知られている。しかしながら、「外国語としての日本語」による学習能力の養成を目的とした教材は、ほとんど開発されていない。そのため、既存の日本語教育における中級レベルの文字（漢字）・語彙・文型に基づいた、ニューカマーの中高生のための教材を試作することとした。

現在すでに初級から上級まで多種多様な日本語教材が開発されてきているが、留学生(成人)を対象としたもの、ビジネスマンを対象としたもの、技術研修生を対象としたものがほとんどで、話題や内容は日本人の高校生にとっても難しいものである。子どもを対象とした教材も開発が進められているが、小学生が抱く関心と高校生のそれとは大きく異なる。

日本語教育を含む外国語教育の教材には、さまざまなシラバス（学習項目選択基準）のタイプがある。「構造（文型）シラバス」、「文字シラバス」「語彙シラバス」、「場面シラバス」「話題シラバス」「機能（行動目的別）シラバス」「タスク（行動達成型）シラバス」などである。一般に「旅行者会話集」などは「場面シラバス」によって構成されており、「ひらがな・カタカナ・漢字テキスト」は「文字シラバス」と「語彙シラバス」の複合されたものである。初級シラバスの多くは、「構造（文型）シラバス」と「場面シラバス」または「機能シラバス」の複合により構成されている。

高校生にとって既成の日本語教材のどの部分を活用することができるか、また、どの部分に改編が必要かを、本研究で検討することとした。高校生を対象とした教材を試作し、試作教材を用いて実際に授業を行い、その教材へのフィードバックを得ることとした。

また、高校とは異なる民間の学習支援の現場の在り方について、具体的検討を行うことも目的とした。日本語教室の多くは、日本語教員の資格を持たない支援者と外国人とがペアを組み、マンツーマンで日本語の授業が行われている。今回、日本語教員、および日本語教育能力検定試験受験準備中の大学生が実際の授業を担当し、そのフィードバックも得ることとした。

## 3. 仮説

### 3.1. 到達目標

学習開始時の日本語のレベルは日本語能力試験N5(基本的日常会話の日本語能力。ひらがな・カタカナ・漢字約100字・語彙約1500)あるいはN4(初級修了の日本語能力。漢字約300字・

語彙約3000)である。高校で、各教科の授業やクラブ活動など豊富な日本語との接触があることから、本研究を実施する民間の教室で、週1回2時間の学習を1年間(約40回)継続することにより、日本語能力試験N2(学習進度によってはN3)レベルに到達することを目標とする。日本語能力試験N2のレベルは、東南アジアなど非漢字圏諸国では、日系企業に就職するために必要とされるレベルである。また、N3は文章や交渉などに用いる基本的な文型が多く含まれる「仕事のために必要な日本語の基礎能力」ともいえるレベルである。

### 3.2. 動機づけ

子どもの日本語教育や成人を対象とした日本語教育では、「先生が好きだから勉強しよう」「同じ国から来た友だちがいて楽しいから勉強しよう」といった「親和動機」に支えられていることが多い。しかしながら、学習能力を獲得し、思考能力を鍛えるためには、「学習そのものの中に楽しみを見出す」といった「内的動機づけ」を育てることが重要である。そのため、教材作成にあたり、高校生の知的好奇心をできるだけ刺激する内容を選択することが有効である。また、「就職の際に証明書として用いることができる」、「大学入試に資格として提出することができる」、「給料が高くなる」などの「外的動機づけ」も学習を促進することが知られている。そこで、日本語能力試験(N2あるいはN3)の用途を説明し「外的動機づけ」を強化することとした。

### 3.3. 学習目標1 基本的中級文型の理解

日本語教員の間でも非常に扱いが難しいとされている「中級文型」を中心に読解力を伸ばすことができると考えた。中級文型の基礎が理解されていないと、文章を既知の単語だけで「飛ばし読み」することにより、深い理解を得ることができない。これは、留学生教育でも同様であるため、現在までに作成された様々な中級文型学習のための日本語教材や文型辞典からの応用が可能であると考えた。ただし、留学生(高等教育の学習者)と高校生の興味や関心はおのずから異なっており、本研究では、ニューカマーの中学生・高校生にとって身近な話題、例えば、生活圏での出来事、高校での話題、アルバイトなど、話題や素材などの点では、成人用の教材を大きく改変する必要がある。

### 3.4. 学習目標2 精密な読解力の養成

ニューカマーの中学生・高校生にありがちな安易な「飛ばし読み」の習慣が教科理解を阻害していることが予想される。このわかる単語だけをつなげて類推して読む「飛ばし読み」の習慣を変えるために、既成教材の中から毎回いくつかの小品を選び、「文章を深く読む」ことを指導することによって、変容が起こるという予測をした。

### 3.5. 学習目標3 漢字・語彙の習得

漢字の習得は、漢字圏出身者(中国など)か非漢字圏出身者(フィリピン・ネパールなど)かによって大きくその進度が異なることが既に知られている。また、授業内だけでは漢字学習や語彙学習は時間的に大幅に不足し、毎日の学習者自身の自己学習が必要であることも広く知られている。また、家庭での学習支援の有無が漢字・語彙学習に大きな影響を及ぼすことも知られている。そこで、既成教材の中からニューカマーの中学生・高校生にとって比較的自己学

習可能なテキストを選び、「1日1テーマ」の漢字学習を宿題として与え、簡単な復習テストを行い、定着を測ることができると考えた。家庭内に漢字・語彙学習の支援者がいない場合には、友人関係も支援者となりうると考えた。家庭学習を中心とした自己学習の習慣づけを行うことが必要であり、その可能性を探ることとした。

## 4. 調査・研究方法

### 4.1. ニューカマーの高校生を対象とした授業実施

#### 4.1.1. 授業実施期間

2011年4月～2011年9月

4月の教室開設時には、2011年度第2回日本語能力試験が実施される2011年12月まで教室活動（一斉授業）を継続する予定だったが、諸般の事情により、一斉授業を実施する期間を短縮した。本報告書「5. 結果」「6. 考察」で詳述する。

#### 4.1.2. 授業実施の場所

「多文化サポートセンター川崎」（神奈川県川崎市川崎区）

#### 4.1.3. 授業時間数と授業内容

週1回土曜日3時間：午後1時～4時

漢字30分＋読解30分＋中級文型（導入と作文）90分（休憩10分×3回）

クラス形態の授業を実施

#### 4.1.4. 学習者

ニューカマーの高校生（以下には1回以上授業に参加した学習者全員を記す）

学年：高校1年生8名、2年生2名（このうち定時制高校生2名）

年齢：16歳～19歳

性別：男子5名、女子5名

出身：漢字圏出身者3名、非漢字圏出身者7名

母語：中国語3名、ネパール語2名、タガログ語5名

滞日期間：約6カ月～約5年

居住地：神奈川県

通学圏：川崎市（徒歩圏、自転車による通学圏）9名

横須賀市（電車とバスによる通学：2時間弱）1名

#### 4.1.5. 教員およびコーディネータ

5名：川崎市ふれあい館職員1名（運営のみに関するコーディネータ）

高校教諭1名

大学教員1名（教育内容に関するコーディネータ）

大学院生1名

学部4年生（日本語教員養成課程履修者）1名

毎回2～3名が教室運営に参加する体制で授業を行った。

#### 4.1.6. 指導内容

漢字小テスト 30分 実施 → 採点 → 返却 → 再テスト → 採点  
読解教材 30分 実施 → クラスで答え合わせ → 重要項目の指導  
中級文型 90分 用法と例文の解説 → 文型作文 → 訂正  
宿題指示（漢字の予習・文型教材の復習）

### 4.2. 授業計画立案のために用いたレベル判定基準・市販の日本語教材・文型辞典

#### 4.2.1. シラバス作成のためのレベル判定資料

国際交流基金・日本国際教育協会著作・編集（2004）『日本語能力試験出題基準改定版第2刷』  
凡人社

KAWAMURA Yoshiko, KITAMURA Tatsuya and HOBARA Rei. (1997-2009) 『日本語読解学習支援システム：リーディング チュウ太・チュウ太の道具箱』 <http://language.tiu.ac.jp/tools.html>（最終閲覧日2012年5月12日）

#### 4.2.2. 市販漢字練習帳（日本語教育用）

唐澤和子・木上伴子・渋谷幹子（2010）『にほんごチャレンジ N4-5 かんじ』アスク出版

佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3漢字』アスク出版

佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3語彙』アスク出版

佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N2漢字』アスク出版

佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N2語彙』アスク出版

#### 4.2.3. 市販読解教材（日本語教育用）

小出慶一（2008）『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本〈中級〉』産能大学出版部

小出慶一（2008）『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本〈初中級〉』産能大学出版部

小出慶一（2008）『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本〈中上級〉』産能大学出版部

#### 4.2.4. 市販中級文型練習帳

佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3文法』アスク出版

佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N2文法』アスク出版



#### 4.2.5. 文型辞典

文型辞典に関しては、教材作成をするうえで重要な役割を果たした。それぞれの特徴を簡潔に記すこととする。

○グループ・ジャマシイ（編著）（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版

文型の説明が非常に詳しく、用例も豊富。一方用例は長く、難しいものも多い。日本語教員が授業準備に用いたり、十分な読解能力を有する中級の後半から上級の学習者にとって役に立つ。

○友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2007）『どんなときどう使う日本語表現文型辞典』アルク

学習者向けに書かれていて、用例や文型説明などすべてふり仮名でわかりやすい。英語・中国語・韓国語の対訳も付いているため、学習者が自習するためには有効な教材。用例も比較的短く、平易な文が多く、セルフラーニングに適している。

○目黒真実（監修）/アスク編集部（編）（2008）『“生きた”例文で学ぶ 日本語表現文型辞典』アスク出版

類似した用法や意味を持つ文型や、対比的な意味を持つ文型がまとめて提示されている。例文も豊富。各文型にも簡単な会話がついているので、実際の場面での使用例が理解しやすい。すべてふり仮名付きで、セルフラーニングにも適している。

○市川保子（2007）『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク

中級で扱う文型を助詞、文末表現、従属節などに分け、教える際のポイントがまとめてある。学習者にとって学習しにくい箇所、学習者が躓きやすい箇所や学習者からの質問に対する解説例などもある。日本語教師あるいは指導者が、指導前の準備として本書を用いることで、より効果的に指導することができる。

○松岡弘（監修）/庵功雄・松岡弘・中西久実子・山田敏弘・高梨信乃（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

文型、文法項目の詳しい説明があり、学習者からの質問に対して正確に答えるために役にたつ。

○白川博之（監修）/庵功雄・中西久実子・高梨信乃・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

文型、文法項目の説明が詳しい。日本語文法の基礎を理解することができる。

#### 4.3. 授業方針と教材作成

本授業の方針は以下のとおりである。

- (1) 市販教材を用いて漢字や生活語彙に関してはセルフラーニングの習慣をつけることを目指す。
- (2) 外的動機づけとして、「日本語能力試験N2あるいはN3」の受験を奨励する。
- (3) 教室活動では、できるだけ学習言語獲得を目指す。
- (4) そのため、読解では平易な日本語を使いつつも、グラフの読み取りや解釈、心情の理解など、「深く読む」ことを目指す。
- (5) 平易で身近な話題を用いつつ、新聞などに用いられている基本的な日本語中級文型を習得し、理解することができるようになるとともに、発話・作文など産出能力も培うことを目指す。

授業開始時点で、高校生を対象としたクラス活動用の教材が市販されていなかったため、成人学習者用の教材に準拠しながら、話題を高校生向けに変更して新たな教材づくりを行うこととした。

このうち、(1)～(2)に関しては、上述の『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3漢字』と『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3語彙』を学習者全員に購入させ、毎週宿題を指示することによって、セルフラーニングを促すこととした。

(4)の読解については、『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本〈初中級〉』の中から、高校生に理解しやすい話題を選び、毎回1題(6ページ程度)を目安に精読することとした。

(5)の基本的な日本語中級文型に関しては、高校生の興味関心を引く内容で作成された適切な教材がなく、また学習者からの質問に適切に対応するためには相応の時間がかかるため、教員2名が教材を作成することとした。学習者のセルフラーニングを支援するため、市販教材である『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3文法』の文型提出順に準拠することとした(「10.資料」の資料1を参照)。

#### 4.4. 質問紙調査

ニューカマーの中学生や高校生に指導した経験のある専門家3名と、今回の授業に「教員」として参加し、多くの困難を経験した大学院生・大学生を対象として質問紙調査を行った。その概要は以下のとおりである。

○対象人数：5名

年齢層：20代2名、30代1名

40代1名、50代1名

性別：男性0名、女性5名

在住地域：神奈川県4名、山梨県1名

職業・役割：日本語教材作成者1名

大学教員(元中学教員)1名

ニューカマーの中高生を対象とした学習支援コーディネータ1名(本調査協力者)

日本語教員(大学院生)1名(本調査における教員)

大学4年生(日本語教員養成課程受講中)1名(本調査におけるボランティア教員)

○調査項目：10項目(「10.資料」の資料2を参照)

1. 氏名
2. 中学生・高校生への学習支援・日本語教育の経験、その他の教育の経験
3. 中学生・高校生への日本語教育における使用教材
4. 使用教材に関する意見
5. 今まで実施した日本語教育や学習支援の形態(クラス・グループ・個人)
6. その学習形態の長所と短所
7. 中学生・高校生の学習意欲を維持するための工夫
8. 日常会話と学校での教科学習で必要とされる日本語の違い

9. 中学生・高校生の中級日本語指導のありかた（理想と現実）
10. その他（中学生・高校生をとりまく環境の問題など）

## 5. 結果

### 5.1. 授業の実施状況

2011年4月から9月の半年間で、計14回の授業を行った。当初の計画では2011年12月まで開設する予定であった。しかし、2011年3月に起こった東日本大震災の影響により、生徒の学習環境や学習動機が整わなかったこと、特に家庭の経済状況の悪化（生計維持者の失業等）により、高校生が家族の生計を支えざるを得ないといった事態が多く生じたことによる学習継続の困難もあり、やむを得ず9月で一斉授業を終了した。詳しくは「6. 考察」において述べる。

### 5.2. 授業目標の達成状況

本授業における目標の達成状況は、以下の通りであった。

#### (1) セルフラーニングの習慣づけ

生徒たちのセルフラーニングを促したが、ほぼ全員が家庭内での学習を行うことができなかったため、セルフラーニングの習慣づけを行うという目標は達成できなかった。

#### (2) 「日本語能力試験N2あるいはN3」への到達

生徒たちが日本語能力試験N2、N3へ到達することを目標としていたが、本授業の中では達成できなかった。

#### (3) 基本的中級文型の理解に対する取り組み

『日本語能力試験』対策『日本語総まとめ N3 文法』に準拠した、高校生向けの「練習ノート」を作成することができた。編集に際しては、高校生にとってわかりやすい話題、身近な話題を中心に編集を行った。この「練習ノート」は、年度末に大幅な改善を重ね、冊子としてまとめた（「10. 資料」の資料1を参照）。今後は、このような練習ノートを必要とするニューカマーの中学生や高校生、あるいはその支援グループに配布する予定である。

#### (4) 精密な読解に向けての取り組み状況

授業を通じて、ニューカマーの高校生の多くが、自分が理解できる単語だけをつなげて読む、いわゆる「飛ばし読み」を行っていることが確認できた。しかし、教員が「飛ばし読み」による誤解を指摘しても、生徒は「だいたいわかればいい」という反応をすることが多く、「精密に読むこと」に対する生徒の興味を引き出すことができなかった。また、「精密に読む」ための教材として、笑い話、オチのある話や感動を伴う話を用いたが、これらに対する生徒の関心も想定以上に薄く、興味を引き出すきっかけにはできなかった。

#### (5) 漢字・語彙の習得に関する取り組み状況

毎回の授業で宿題として漢字の学習を課し、その範囲の復習テストを次回の授業で行った。



生徒の多くは80%程度正解したが、これらのほとんどが、テストを受ける直前の5～10分という短い時間で学習を済ませた結果であった。このような短期記憶による学習では、漢字・語彙を定着させることができないため、結局、長期的にみると、これらの取り組みを生徒たちの漢字・語彙の力の向上につなげることはできなかった。

### 5.3. 質問紙調査の結果

日本語教育従事者に対する質問紙調査は、すべて記述式の回答方式であったため、詳しい回答内容については省略する。「6. 考察」では、本調査で寄せられた意見をもとに今回の授業の結果について考察する。

## 6. 考察

### 6.1. 震災による学習環境の悪化

今回の日本語教室の実施と教材開発は、東日本大震災という空前絶後の大惨事の直後に始まった。震災は首都圏の外国人にも大きく影響を及ぼし、外国人家庭の親の失業、自営業者の倒産、不安による緊急帰国、再入国など、非常に落ち着かない状態で4月の新学期を迎えることになった。さらに、外国人家庭の場合、正確な情報が届きにくく、噂による不安も大きなストレス源となっていた。さらに、親の移住（国内移住・国際移住）に伴い家庭そのものが不安定であるというケースもある。こうした状況が高校生の学習意欲に影響を及ぼさないはずがない。

震災によって閉店した店舗も多く、親の失業や倒産により高校生が主たる家計維持者となるケースも多かった。4月当初には、10名の学習者が本教室に集まったが、高校の休日である土曜日には一日中アルバイトをすることを余儀なくされ、教室から離れるといったケースもあった。また、定時制高校に通う生徒は、週日の昼間アルバイトをし、それから定時制高校に通い、帰宅は10時過ぎになるという。そのような状況で落ち着いて学習に専念することは、不可能である。普通高校に通う学生の場合でも、初級日本語が話せるようになると、成人の外国人以上にアルバイトのチャンスがある。あるケースでは、週日は毎日午後4時から10時まで飲食店のホールのアルバイト（ウェイトレス）をし、その仕事ぶりを評価されて土日もアルバイトしてほしいと頼まれたという。

このような厳しい生活環境の中で、日本語学習を継続することは非常に困難であることが予想される。このような生きにくさを抱える高校生にとって、将来の職業選択のために「現在の時間を学習のために使う」ということはなかなか理解しにくいものであると思われる。ニューカマーの中学生・高校生の学習を保障するための奨学金・助成金、それを支える制度作りが急務であると思われる。

今回、直接的に訴えがあったわけではないが、どの学習者も何らかの生きにくさを抱えていることが多いように思われた。このような点に着目し、居場所を形成し、個々の問題や秘密を厳守した上で解決に結びつけることができる人材がまずは必要である。これらは、アンケート調査の結果からも明らかになった点である。

今回、授業を行った地域には、既にそのような取り組みがあり、学習者一人ひとりの状況を運営コーディネータが的確に把握していた。こうしたケアがあってこそ、学習が成立するので

はないかと思われる。

## 6.2. 学習の動機づけの難しさ

6.1で述べた状況下、日本語学習よりも生徒の生活にとって切迫した事柄（アルバイト等）があったため、学習者が授業開始時に揃い、一斉に授業を開始できるということにはなかった。学習の動機づけは、まずは、「高校の勉強が難しい」ということ、「もっと日本語が上手になりたい」ということにあることは確かだが、その動機づけよりも、生計を支えるためのアルバイト、高校生活における楽しみ（例えばクラブ活動）に対する動機づけの方がはるかに強い。

高校生であっても、「あの先生に会いたいから勉強しよう」といった親和動機を軸に、徐々に外的動機づけ（日本語能力試験合格による昇給）へ、そして学習事態を楽しむことができる「内的動機づけ」に移行することが可能なのであって、それには十分な環境整備と時間が必要であることがわかった。

アンケートからも、ニューカマーの中学生・高校生の居場所の大切さ、自分自身の有用感を持つことが非常に重要であるという意見が得られた。こうした基本的な人間としての尊厳を保障されてこそ、学習の動機づけが生じるのではないかと思う。

ニューカマーの子どもは予想以上に「生きにくさ」を抱えていることが多い。まずは、それを受け止め、「人間としての尊厳を守る」「あなたがここで生きていることがすばらしいのだ」という姿勢を指導者が持つ必要があることを改めて感じた。年齢の割には、「先生が好きだから勉強しよう」「同じ国から来た友だちがいて楽しいから勉強しよう」といった「親和動機」に支えられているケースが多いことも確かである。ここから、「学ぶことが楽しい」といった「内的動機づけ」を育てるための具体的方略は残念ながらまだない。ただし、教材作成にあたって、繊細なハイティーンにとって知的好奇心を掻き立てる話題を選択することは可能であると思われる。今回は、中級文型を中心に教材作成を行ったが、今後、読解教材、あるいは、テレビや映画などを利用した教材を作成することによって、こうした点をより改善できるように思われる。

## 6.3. 学習形態に関する考察

セルフレARNINGの習慣づけを目標としたが達成できなかった背景には、上記環境的要因があり、また、家庭内にセルフレARNINGを支援する環境がない（親の支援を受けることができない）といった原因が考えられる。漢字に関していうならば、N3レベルは日本人が小学校で学習する漢字の範囲内である。このレベルの漢字を獲得しないまま生活するとなると、将来にわたって実質的な文章を読む力は培われないであろう。現在の日本では、単純作業や「手に職をつける」といった職種であっても、基本的な読み書き能力を前提とされている。中学校あるいは高校にセルフレARNINGセンターを設けて、チューター（卒業生・大学生）などの介助のもとにセルフマスターの習慣づけをする必要があるのではないかと思われる。こうした取り組みは、日本人のいわゆる学習困難児のケアにもつながるものと思われる。

学習の動機づけでも記したが、日本語学習はニューカマーの中学生・高校生にとって優先順位は必ずしも高くない。こうした学生を、ある一定の時間的枠組みの中で教育することは非常に困難であるということが明らかになった。不定期的な参加、自分が使える時間だけ勉強したいというニューカマーの中高生のニーズに合わせるには、クラス形態よりも、マンツーマン形

式での指導が有効であるように思われる。先に記したが、2011年9月以降は、クラス形式での授業をあきらめ、教材のみ準備しておき、その日に学習しに来た参加者に適した教材を配付し、その解説を行うという形態に切り替えることになった。学習者は都合がつくと学習に参加するという形で、緩やかに学習を継続していった。断続的であっても、学習継続する意思があるのであれば、そのような状況にあった学習形態を模索する必要があると思う。

#### 6.4. 到達目標

日本語能力試験N3、N2に到達できなかった主な原因は個々の学習者がそれぞれの生活上の理由により学習時間を確保できなかったこと、また、セルフラーニングの習慣形成ができなかったことにある。今回、ニューカマーの高校生が「学校外」での一斉授業に参加することが予想以上に困難であることが明らかになった。一方、日本社会で安定した職を得て社会の一員として生活するには、少なくとも小学校で学習する漢字のレベルに相当するN3レベルの読み書き能力が必要である。今後、「学校教育」あるいはそれに代わるある程度の義務を伴う制度を形成し、この到達目標を達成するための枠組み作りが必要であることを強く述べたい。

#### 6.5. 基本的中級文型の理解に向けた教材作成に関する考察

中級文型は日本語教員の間でも非常に扱いが難しいとされているが、現在までに作成された様々な中級文型学習のための日本語教材や文型辞典の利用と応用が有効であることも明らかになった。現在は主にボランティアによってニューカマーの中学生・高校生の学習支援が行われているが、文型辞典を調べるという「ひと手間をかける」ことによって、よりよい指導ができるのではないと思われる。今回作成した「練習ノート」の巻末に、使いやすい文型辞典を解説付きで列挙した。支援者の参考にしていただければ幸いである。

#### 6.6. 精密な読解に関する考察

生徒たちに精密な理解をさせる試みを行ったが、興味を引き出すことができなかった。これは、日本語で情報取りをすることに精いっぱい、日本語を味わうレベルには達していないためではないと思われる。内容的には難しいことが予測されるが、短い「小説」、簡単な「詩」などを読むことによって、ことばを味わうことを学んでいけるのではないと思われる。日本語教材は、こうした「ことばを味わう」経験を豊富に持つ人を対象に作られている。ニューカマーの中学生・高校生にとっては、むしろ、小学校や中学校の教材の中ですぐれたもの、あるいは、彼らの母文化の伝承文学を扱った作品などを教材化していくことが有効であるように思われる。

#### 6.7. 漢字・語彙の習得に関する考察

漢字の習得に関しては、セルフラーニングができないという点で、大きく躓いた。短期記憶による学習だけでは、正しい字形を覚えること、語源や意味の広がりを知ることは不可能である。このような点に関しては、授業での指導や学習者自身の努力に任せておけば改善が期待できるものではない。先にもふれたが、学校教育の中に、セルフラーニングの時間とその介助者(卒業生・大学生・ボランティアなど)を制度として導入する必要があると思う。

## 6.8. 「教師」あるいは「支援者」の資質の重要性

中級以上の指導に関しては、一定の専門性が求められる。例えば、初級の日常会話であれば助詞「～に」を用いるところを、中級文型では「～について」「～において」「～に関して」「～にわたって」のように、詳細に分化していくのである。これは、日本語教師にとっても、授業前の教案作成や例文作成で苦勞する点であり、何の準備もなしに教えられるわけではない。さらに、このような文型は抽象的課題、いわゆる「堅い話」の中で用いられることが多く、例文で用いられる語彙のレベルも一般に高くなりがちである。また、誤用と正用の区別もつきにくく、その解説も非常に難しい。

このような点から、中上級の日本語指導には、日本語教育の専門性を持つ教員が当たる必要があると思われる。そして、現在は市民活動や公民館活動として「学校教育の外」でこのような指導が行われているが、上記動機づけの点からいっても、それは適切な状況ではないと思う。今後、学校教育の一環として、「日本語の習得」が位置づけられることを願ってやまない。

## 7. 結論

本調査では、以下の点が明らかになった。

- ・ニューカマーの中学生・高校生の中には、非常に厳しい経済的・家庭的環境に置かれているケースが少なくない。
- ・ニューカマーの高校生が、漢字・語彙・基本文型を学ぶことは予想以上に困難である。
- ・ニューカマーの高校生は、環境的要因によりセルフラーニングの習慣を形成することが難しい。
- ・ニューカマーの高校生がセルフラーニングの習慣を形成するためには、学校教育の中にセルフラーニングの制度（一定の時間と介助者）を設置することが有効である。
- ・学習動機を高めるためには、教師や支援者がニューカマーの中学生・高校生の抱える「生きにくさ」を理解し、彼ら・彼女らの尊厳を認め、自尊意識を高めることが重要である。
- ・中級文型の指導に関しては、日本語教育の専門的知識が必要である。
- ・表面的な情報収集のための読解ではなく「精密に読む」習慣を形成するには、日本語教育の教材よりも、むしろ学校教育の小中学校の教材の一部が有用ではないかと思われる。

## 8. 展望

今回は、本研究の成果として、ニューカマーの中学生・高校生を対象とした中級文型練習用の「練習ノート」を作成することができた。今後、それに連動する形で、「精密に読む」「読むことの楽しみを知る」ための読解教材を作成し、実際に試用してみたい。

今回、ニューカマーの中学生・高校生の教育に力を尽くしてきた5人の専門家に貴重な意見をうかがうことができた。しかしながら、5人の意見というのはいかにも少ない。今後、全国的にどのような取り組みがなされているのか、そこでどのような問題が認識され、どのように解決が模索されているのかについて、網羅的に調査してみたい。

また、簡単に実現することではないことは十分承知の上ではあるが、学校教育の中に「セルフラーニングセンター」を設置することを提唱していきたい。放課後などの一定時間、校内に



場所を設置し、介助者（卒業生・大学生・ボランティア）が常駐し、簡単な採点や訂正、次の課題の提示などを行うことができれば、ニューカマーの中学生・高校生が漢字・語彙を学習することが可能になるのではないかと思う。

以上が今後の課題である。

## 9. 引用文献・参考文献

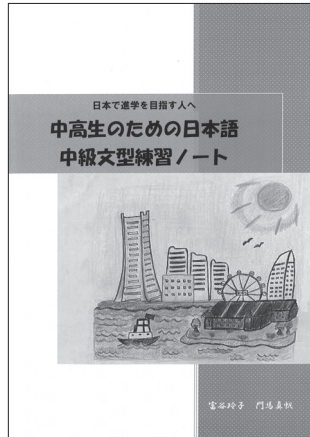
- 市川保子（2007）『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- KAWAMURA Yoshiko, KITAMURA Tatsuya and HOBARA Rei. (1997-2009) 『日本語読解学習支援システム：リーディングチュウ太・チュウ太の道具箱』 <http://language.tiu.ac.jp/tools.html>（最終閲覧日2012年5月12日）
- 唐澤和子・木上伴子・渋谷幹子（2010）『にほんごチャレンジ N4-5 かんじ』アスク出版
- グループ・ジャマシイ（編著）（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
- 小出慶一（2008）『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本〈中級〉』産能大学出版部
- 小出慶一（2008）『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本〈初中級〉』産能大学出版部
- 小出慶一（2008）『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本〈中上級〉』産能大学出版部
- 国際交流基金・日本国際教育協会（編著）（2004）『日本語能力試験出題基準 改定版 第2刷』凡人社
- 佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3漢字』アスク出版
- 佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3語彙』アスク出版
- 佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N2漢字』アスク出版
- 佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N2語彙』アスク出版
- 佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3文法』アスク出版
- 佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N2文法』アスク出版
- 白川博之（監修）／庵功雄・中西久実子・高梨信乃・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2007）『どなたときどう使う日本語表現文型辞典』アルク
- 松岡弘（監修）／庵功雄・松岡弘・中西久実子・山田敏弘・高梨信乃（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 目黒真実（監修）／アスク編集部（編）（2008）『“生きた”例文で学ぶ 日本語表現文型辞典』アスク出版



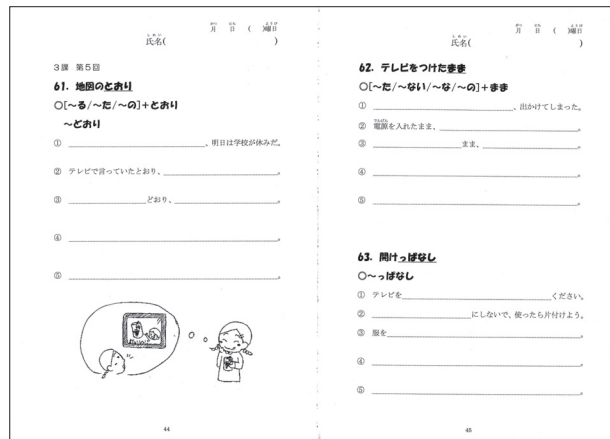
## 10. 資料

### 【資料1：作成教材】

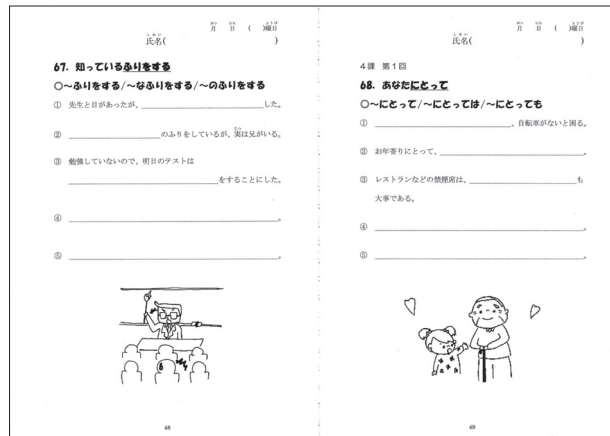
富谷玲子・門馬真帆(2012)『日本で進学を目指す人へ 中高生のための日本語中級文型練習ノート』110ページ



表紙



中面1



中面2

【資料2：アンケート】

2012年3月15日

「外国にルーツを持つ中学生・高校生を対象とした日本語教育の研究」へのご協力をお願い

神奈川大学 富谷玲子

2011年4月より、多文化サポートセンター川崎にて毎週土曜日の午後3時間、中学生・高校生を対象とした日本語教室を開催し、ワークブック等学習者の年齢や関心に即した教材を作成しつつ進めてまいりましたが、実施するうちに、いくつもの問題点が浮かび上がってきました。そこで、中学生・高校生に対する日本語教育あるいは学習支援を行っていらっしゃるみなさまに、忌憚のないご意見を伺いたく、お願いする次第です。下記質問項目につきまして、本質問紙に挿入するかたちで1～2ページの自由記述をお願いできれば幸いです。お忙しいところ大変恐縮ですが、どうかご協力のほどお願い申し上げます。

なお、本研究は、漢字検定協会研究助成を受けて行っております。将来、漢字検定協会への報告書あるいはその他の研究発表の場で、頂戴したご意見を引用させていただく可能性があります。その節にはご連絡し、お名前の出し方について別途事前にご相談いたします。以上、どうかよろしくご協力申し上げます。

1. お名前
2. 中学生・高校生への学習支援・日本語教育のご経験、その他の教育のご経験
3. 中学生・高校生への日本語教育における使用教材
4. 使用教材に関するご意見
5. 今まで実施なさった日本語教育や学習支援の形態（クラス・グループ・個人など）
6. その学習形態の長所と短所
7. 中学生・高校生の学習意欲を維持するための工夫
8. 日常会話と学校での教科学習で必要とされる日本語の違い
9. 中学生・高校生の中級日本語指導のありかた（理想と現実）
10. その他（中学生・高校生をとりまく環境の問題など）

以上